千葉県文化財センター

研　究　紀　要　16

— 20周年記念論集 —

平成７年１月

財団法人　千葉県文化財センター

発 刊 の 辞

財団法人千葉県文化財センターは、昭和49年11月に創立して以来、本年で20年を迎えることができました。この間、県内に所在する埋蔵文化財に関する数多くの調査、研究、普及活動を実施してまいりました。その成果は、発掘調査報告書をはじめ、多くの刊行物等に見られるとおりです。また、研究活動においても、研究紀要をはじめとして調査に関連する独自の研究事業を行ってまいりました。

研究紀要は、第Ⅰ期「考古学から見た房総文化」、第Ⅱ期「自然科学の手法による遺跡・遺物の研究」、第Ⅲ期「生産遺跡の研究」を主題としてすすめてまいりましたが、このたび創立20周年の記念すべき年に当たり、過去20年の調査の成果を集積し、当文化財センターの活動の一助とするために、研究紀要16号を創立20周年記念論集としてとりまとめました。

本書に掲載された論文は、現在、在職中の職員及び転出された方々が、業務のかたわらにとりまとめたものです。考古学研究の参考資料としてのみならず、埋蔵文化財調査の技術向上のための資料として広く活用されることを期待してやみません。

平成７年１月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　奥　山　　浩

編 集 後 記

当センターの創立20周年にあたり、10周年と同様に（「研究紀要」10号、昭和61年３月発行、目次別掲）センター職員（過去に在籍した者を含む）によるセンターの調査成果に関係する論考をとりまとめ、「研究紀要」16号として刊行することとしました。

刊行の経過は、下記のとおりですが執筆者（途中辞退者を含め）が、多忙な日常業務の中で、更に、期間が限定された調査活動に従事しながら、原稿をとりまとめるのは容易なことではありませんでした。そのため、人事異動に伴う分担事務の変更を主な理由として、辞退を申し出る者も出ました。それにもかかわらず現職員12人、旧職員10人から21篇の厚稿が提出され、ここに刊行される運びとなりました。

執筆された各位の御苦労に謝するとともに20年の成果の１つとして広く活用されることを願ってやみません。

なお、「研究紀要」16号の編集業務は、資料課渡邉智信主任研究員が担当しました。

編集委員会

刊行経過

平成５年８月10日	「研究紀要」16―20周年記念論集の刊行について　寄稿希望募集
８月31日	現職員募集締め切り
９月16日	募集締め切り（26人25篇）
10月14日	希望者全員に原稿執筆依頼
平成６年３月20日	第１次原稿提出期限
４月13日	未提出の執筆者の確認
６月30日	第２次原稿提出期限
７月８日	編集委員会―記念論集掲載論文について（４人辞退により22人21篇）
８月16日	入稿
平成７年１月30日	刊行

「研究紀要」10号－10周年記念論集－目次

発刊の辞　理事長　山本孝也

新東京国際空港№12遺跡の有舌尖頭器をめぐって……鈴本道之助

浅鉢形土器出現の背景……古内茂

—飯山満東遺跡を中心として—

阿玉台式土器前半期の一様相……原田昌幸

—常磐道柏地区の調査成果から—

微隆起線文土器群の変遷と分布……西山太郎

—加曽利ＥⅣ式期に認められる微隆起線文土器について—

水洗選別法による遺物採集の効果……小宮孟

—魚類遺骸を中心に—

関東地方における弥生時代中期前半の地域相……渡辺修一

『北関東系土器』の様相と性格……小高春雄

印旛沼南部地域における後期弥生集落の一形態……藤岡孝司

—八千代市権現後・ヲサル山遺跡の分析—

東国後期古墳分析の一視点……白井久美子

—鉄鏃から見た千葉市生実・椎名崎古墳群—

千葉市大北（おおきた）遺跡の検討……萩原恭一

—律令制下東国の一様相—

下総国相馬郡正倉跡の再検討……大野康男

８世紀における下総の国司について……関口達彦

下総国印幡郡村神郷とその故地……天野努

房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題……佐久間豊

関東型式宝篋印塔の研究……斎木勝

中国製古銭の分析研究……服部哲則

戦国時代末期の城郭からみた権力構造……柴田龍司

—下総・原氏を中心として—

千葉県考古学史資料目録稿……西野元

—明治期—

千葉県文化財センター研究紀要16　―20周年記念論集―

平成7年1月30日　発　行

発 行 者　財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809－2
電話　043（422）8811

印 刷 所　株式会社 弘　文　社
市川市市川南2－7－2